

「ダニエルの神の前に」

ダニエル 6 : 25 - 28

May.3.2020

ダニエル 6 : 25 - 28 (パワポ)

Preface

「あなたがたに平安が豊かにあるように。」と宣言しながら、自分の立場と地位と権力を守ることに、汲々となっていた者から、人の幸いと民の平安を願う者に変えられた人物が、また一人登場してきます。

メディア・ペルシア王国の臨時過渡期政府の王、ダレイオス王です。

曲がりになりにも王であり、しかも、あの中東の覇者バビロンを打ち倒したメディア・ペルシア王国の臨時政府の王です。

さぞかし、その権力の座に酔いしれ、満喫しているだろうかと思いきや、意外や意外に、その座ゆえに、気が気じゃないような状態に置かれていたということが、ダニエル書 5、6 章をよく見てみますと、分かってきます。

復習になりますが、ちょっと聖書を遡って見てみたいと思います。

Part One

ダニエル 5 : 31 (パワポ)

今ここでは、「ダレイオスが、国を受け継いだ。」と書いてありますが、正確に言いますと、「国を任せられた。」ということです。

もともと、それまでの中東の覇者であったバビロンを打ち倒したのは、ダレイオスではなく、甥っ子にあたるキュロス王です。

キュロス王は、メディア王国（ペルシアの北西に位置）の王族出身の母と、ペルシア王国の王であった父との政略結婚の間に、ペルシアの王子として生まれました。

もともと、ペルシアはメディアの属国のような存在でしたが、このキュロスによって立場が逆転し、ペルシアがメディアを吸収合併することになり、その勢いそのままに、バビロン帝国を BC 539 年に滅ぼしていきました。

そこで、本来ならば、キュロス王が、メディア・ペルシア王国の王として、都に残り、新政府を導くはずでしたが、キュロスには、まだまだ征服しなければな

らない地域があり、軍を率いて戦場へと出て行かなければなりませんでした。

そこで、都に留まって国を治める王として立てられたのが、メディア人のダレイオスです。

キュロスは、母方の叔父、つまりメディア人ダレイオスを、自分が都を留守にしている間の政権を担う王として、立てるのです。

これによって、ペルシア王国に吸収合併されたメディア王国の面子を一応立てたことにもなりました。

だから、ダレイオスの王就任は、異例の62歳という高齢でした。

しかも、2年間という期限付きの臨時政府の王です。

キュロスが征服戦争を終え、都に帰った時には、当然のようにキュロスに王座を明け渡すこととなります。

現代に例えるならば、オーナーのさじ加減で、いつ首が飛ぶかもわからない雇われ店長や雇われ社長のような、雇われ王でした。

それでも、王という肩書ゆえの責任は、しっかり取らされます。

もちろんダレイオス王は、王という権力者でありますから、王としての権限の行使と王としてある程度の享楽にふけることは出来たようです。

でもやっぱり、これまで登場してきた、その権力を勝手気ままに、好きなように振るっていた、ネブカドネツアル王やベルシャツアル王とは違いました。

王のはずなのに、部下や臣下になめられている様子がよくわかります。

ダニエル6：5－9（パワポ）

6節で、「大臣と太守たちは、王のもとに押しかけて」とありますが、今まで、部下や臣下に押しかけられた王なんかいましたか？

今、ダレイオス王は、メディア・ペルシア王国の臨時ではありますが、曲がりなりにも王であります。

なのに、そんなことは気にも留めないかのように、大臣や太守たちが、押しかけて来て、王をうまい具合に丸め込むかのように、ダニエルを失脚させるための禁令を制定させてしまうのです。

Part Two

ダレイオスは、62歳にして、人生初の王という大役を任せられました。

緊張と意気込みの現れだったのか、彼なりに国をうまく治めようと、120人の太守を任命して、さらに3人の大臣を立て、3人の大臣の内、神のすぐれた霊が宿っていたために、際立って秀でていたダニエルを大臣の上のくらいに立たせて、国を治めようとしていました。

王が決めたことですから、臣下たちは、王の決めたことに従うだけです。なのに、王の決めた組織体系が気に入らないと、しかも、ダレイオス王が信頼し、唯一気の置けるダニエルを失脚させようと、王に押しかけるのです。

しかも、このダレイオスを説得する臣下たちの言葉が、実に巧妙で、ずる賢いのです。

ダニエル6：6-9 (パワポ)

まず、「ダレイオス王よ、永遠に生きられますように」と口先だけでも表現できる畏敬の念のようなものを表わしてから、「王様、あなた以外の者に、祈願をする者は、獅子の穴に投げ込むようにしてください。」と、王に忠誠を尽くすかのようなそれらしい言葉で、迫っていきます。

ダレイオスにしてみれば、「え、この者たちは、心を換えて、私に忠誠を尽くそうとしているのか？」と、お気に入りであり、唯一信頼のおけるダニエルを失脚させるための策略だとは露知らず、その言葉通りに従ってしまいます。

臣下たちは、ダレイオスが期限付きの王であることは知っていました。

また、ダレイオスも、すべての臣下たちは、自分ではなく、真の王であるキュロス側についていることも知っていました。

そんな中での突然の忠誠を尽くすかのような提案です。

不思議に思いながらも、言われるままに禁令を制定し、文書に署名までしてしまいました。

王の弱みに付け込んだ、臣下たちに押し切られるように、上手いこと、丸め込まれた感じになってしまいました。

ネブカドネツアル王の時代には、こんなことは一切考えられませんでした。

王のところに押しかけて来て、こんな提案をしようものなら、その場で即刻、首が飛びますね。

でも、臣下たちが、ダレイオス王に押しかけてきたのは、ここだけではなく、もう一度ありました。

ダニエル6：15 (パワポ)

今度は、押しかけてくるだけでなく、「ご承知ください！」と、あたかもダレイオス王を脅迫するかのよう、臣下たちが迫って来ます。

どっちな権力者なのか、分からないような感じになってしまっています。ダレイオス王のつらいところですね。

王は、自分たちの出世欲や安泰のために利用する盾や道具でしかありません。

そんな臣下たちの中で、ひと際、際立つ臣下がいました。ダニエルです。

3、4節を見ますと、ダレイオス王のダニエルに対する信頼がどれほどだったのかが、よくわかります。

ダニエル6：3-4 (パワポ)

ダニエルは、他の大臣や太守よりも際立って秀でていました。

この秀でているという言葉は、管理能力、統率力、リーダーシップなど、いわゆる、人の上に立ち、または部下を束ねる者に求められる素質をすべて、素晴らしく兼ね備えていたということです。

しかも、秀でているからと言って、能力や経験をひけらかすかのように、高慢で、上から目線でなんていうこともなく、とても謙遜でした。

さらに、臣下たちが、自分の首を虎視眈々と狙っているような状況にあるダレイオスにとって、最も安心できたのは、ダニエルの忠実さです。

ダニエルは、ダレイオスを信奉することはありませんでしたが、ダレイオスを王としてしっかりと敬ったのです。

そして、ダニエルの他の臣下との決定的な違いは、「すぐれた霊が宿っていた」ことでした。（これについては何度も触れてきましたが）

この「すぐれた霊が宿っていた」というのを、他の言葉で言い換えるならば、

「人生の不遇や結果を環境のせいにはしない」ということです。

Part Three

誰もが人生生きていて、思うことがあります。

それは、「なんで、私はこんな時代、こんな環境に生まれたのだろうか？」ということなのです。

あの時代に生まれてれば違ったのに、こんな親の元生まれてたら違ったのに、こんな教育を受けられれば違ったのに、こんな友人知人に恵まれれば違ったのに、もう少し背が高ければ、もう少し細ければ、もう少しお金があれば、もう少しおいしいものが食べられれば・・・ きりがありません。

でも、人が生きる人生の本質は、いつの時代、どんな環境でも同じです。

みんな死と隣り合わせで、みんな不健康と隣り合わせで、みんな事故や災いと隣り合わせで、みんな悲しみや苦しみや辛さと隣り合わせで、

この世界には、外見上、より衛生的で、医療が充実し、食糧事情が安定し、住環境が整っているなどの違いがあり、その格差とギャップを埋めていくために努めていく事は、聖書にも書いてある大事なことでありますが、

どの時代、どんな環境にあっても、みんな恐れを持って生きています。

コロナ禍で、こんなにも、人は死ぬことが怖かったんだと、知っているようで知らなかった事実を、実感としてみんな感じています。

こんなにも目に見える形で、社会や世界全体が、死ぬことを恐れながら生きているということを、人間みんなが感じることは、文明が発達したと自ら誇る現代人にとって、初めてかもしれません。

あたかも死なないかのように、造られし被造物を大量に消費しながら、すべてを目まぐるしく回し、死ぬことを否定するかのように動き回っている世の中で、人の本質的な恐れと、その恐れを唯一払しょくすることの出来るイエス・キリストの福音の価値が、如実に示されているように思います。

Part Four

なんでこんな時代、こんな環境に生まれたのだろうか、恨む、怨望（えんぼう）の思いに置いて、ダニエルの右に出るものはいないとも言えるかもしれません。

2, 3世代前に生まれていれば、捕虜になることもなかったし、自分の土地が

あり、自分の家があり、自分の果樹園があり、親から引き離されることもなかった。

もちろん、国を失うようなこともなければ、宦官になるようなこともなかった。

こんなにも、権力に翻弄され、人から命狙われるようなこともなかったかもしれない。

時代や環境を恨めしく思い、そのせいにしたい気持ちや条件を挙げるなら止めどもなく出てきます。

聖書には記されていないので、明言は出来ませんが、ダニエルだって人間です。

こんなこと、一度や二度は思ったことがあったでしょう。

でも、ダニエルは、神から与えられている自由意志をもって選択していった生き方は、すぐれた霊が宿った神の人として生きることでした。

つまり、「人生の不遇や結果を環境のせいにしない」、神の摂理を信頼する生き方です。

神は、変わりません。

唯一まことの父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神の言葉を人生の指針とし、希望とし、命とし、食料とし、エネルギーとし、人生のすべてとして、毎日受け入れ、毎日接し、毎日従い、毎日守ることに徹して、

神を賛美し、ほめたたえ、礼拝することを人生の目的と目標に定めて生きることを、ダニエルは決心しました。

この決心は、時代や環境に左右されません。

むしろ、置かれた時代や環境で、変わることはない平安と、変わることはない安定に身を寄せて生きられる唯一の方法です。

今、早天祈祷会で申命記を学んでいますが、申命記の言葉を何箇所か見てみたいと思います。

申命記 6 : 4 - 14 (パワポ)

申命記 10 : 12 - 21 (パワポ)

申命記 11 : 13 - 21 (パワポ)

主の言葉に従い、主の掟を守り、心を尽くして、力を尽くして、命を尽くして、三位一体なる神様を愛しなさいと、

そして、それを次の世代に伝えなさいと、これでもかというほどに、何度も何

度も出てきます。

ダニエルは、ここで言われていることを決心しました。

これを人生の目標に定めました。

ダニエルは子どもを持つことが出来ませんでした。人の人生において、最も大事なことを次の世代に伝えることにも専心して、今、こうして、2500年後の極東の小さな島国の茨城県南地域に住んでいる私たちが、彼の生き様から、今、この時代、この環境、この置かれたところで、どう生きることが真理に生きることなのかを、教えられています。

神の霊が宿るとは、オカルトの話ではありません。

「神の言葉によって、神の言葉を生きる」ということです。

Part Five

ダレイオスは、この神の言葉を生きるという全く別次元の違う生き方ゆえに、際立って秀でていたダニエルに絶大な信頼を置いていました。

ダレイオスは、臣下として忠実ではあるけれども、王を信奉したり、崇拝する対象には、決してしないことも、よくわかっていました。

それまでのダニエルの生き様を調査して、どう生き方をしてきたのかは、よく分かっています。

あのネブカドネツアル王でさえも、信仰の対象にはせず、当然ながらベルシャツアル王も、キュロス王も、人々は権力の象徴以上の偶像のように信奉し、崇拝していましたが、ダニエルはそうではないことを知っていました。

エペソ 6 : 5 - 8 (パウロ)

ペテロの手紙第一 2 : 13 (パウロ)

ローマ人への手紙 13 : 3 (パウロ)

ダニエルが、これらの言葉にあるような生き方をしてきたことを、ダレイオスは調査と、そして、実際に接してみてよくわかりました。

王を信仰の対象にしなければ、どの権威に付くのが、得になるのかと、計算高く、権力者の前にへいへいするようなことはないけれども、真心をもって、喜んで従ってくれるダニエルが、信頼できました。

ただ、部下として信頼していた以上の心のよりどころのような存在にまでなっていたことがうかがえます。

ダニエル6：13－14（パワポ）

ダレイオスは、臣下たちが自分のところに押しかけて来て、ダニエルが祈っていると告げ口をした時、「あ！ この者たちは、私に忠誠を尽くすふりをして、忠臣ダニエルを落とし入れ、この私までも落とし入れようとだましたのだ！」と気づき蒔いた。

「王は非常に憂い」とありますが、原文では、「自分自身に腹が立った」という意味です。

つまり、臣下の忠誠が欲しいという弱みに付け込まれて、ダニエルを落とし入れる策策を見破ることも出来ずに、ダニエルを獅子の穴に投げ込まなければならなくなってしまった状況を作り出してしまった自分に、腹が立ったのです。

ダレイオスは、ダニエルを助け出そうと手を尽くしたとありますが、王が署名までしたものを覆すことが出来ません。

また、このダレイオスのダニエルを思う気持ちが、他の臣下たちの怒りは、さらに燃え上がりますよね。

ダニエル6：15－16（パワポ）

怒りに駆られた臣下たちが、押しかけて来て、「ご承知ください」と圧迫をかけられながら、仕方なく、ダニエルを獅子の穴に投げ込みました。

ここで、ダレイオスが言った言葉が、意味深げです。

「お前がいつも仕えている神が、おまえをお救いになるように。」

ダレイオスは、ダニエルという人が、自分の臣下ではあるけれども、自分の力でどうこう出来る人ではないということを知っていました。

命を懸けてまで、祈ることを辞めないダニエル。

上手く行っている時だけ、神を崇め、賛美し、礼拝するダニエルではなく、苦しい時も、つらい時も、自分の境遇を妬んで、恨んで当然のような時にも、なお、神を崇め、礼拝するダニエル。

1週間に1回、1時間、礼拝に参加して、はい、終わりという人ではなく、生き方が礼拝であり、神を賛美し、礼拝することを妥協する人ではないし、社会通念や世の常識に左右される人でもない。

また、自分の潔白を暴くために、ロビー活動をするような人でもない、という

ことをダレイオスはよく知っていました。

信仰のない上司ダレイオスが、信仰者ダニエルの信仰を認めるどころか、その神の助けまで願うのです。

ダレイオスは、ダニエルを通して、ダニエルの信じる神は、まことに力であり、救いであり、希望であることを、ダニエルを通して知るんです。

Part Six

クリスチャンが、クリスチャンとして生きているかどうかは、教会ではなく、職場の人に尋ねれば、すぐに分かってしまいますね。

この人は、会社や仕事が人生の人ではなく、神を拝することが人生にしている人だということが、同僚や部下や上司には分かっているわけです。

私たちクリスチャンは、世の経済活動をしている組織で、信仰をもって、神の言葉に生きることは、迷惑をかけるし、損害だって与えかねないし、場違いで、職場の雰囲気や壊すと考えがちですが、本当にそうでしょうか？

事実、ダニエルは、御言葉に生きることをもって、嫉妬心を抱かれるほどに、メディア・ペルシア帝国という組織を生かし、ためになり、この人がいなければこの国が成り立たないと思うほどでした。

ダニエル 6 : 18 (パワポ)

クリスチャンでもないダレイオスが、断食しながら、四面楚歌のような王としての寂しさや恐れを紛らすための遊興さえも断って、ダニエルのために、願掛けをするのです。

つまり、ダニエルは、それほどに国家にとって、無くてはならない存在になっていました。

ダニエルは、ただ、ひたすらに神の言葉を生きただけでした。

神の言葉を慰めや癒す道具として用いるのではなく、神の言葉を生きたダニエルは、帝国という大組織の中でも、最も重宝された人でした。

カネボウの元会長だった三谷康人さんもそんな方だったのかなあとと思います。平社員として入社して、3度の降格と左遷を経験されながら、会長にまで上り詰めて、傾きかけていたカネボウを立て直し、その秘訣を祈りと信仰だと言ってはばからない方です。

三谷康人さんが、クリスチャンだということを知らない人は会社に誰もいないほどですね。

どんなに忙しくて、大変で、馬鹿にされようが、白い目で見られようが、月曜日から土曜日までは誰よりも一生懸命働いて、日曜日は、教会だというので出勤をしないほどに、礼拝生活を大切にしておられました。

そして、何よりも、聖書の教える通りに実践していく事が、会社の発展につながると信じてやみませんでした。興味のある方は、三谷さんの著者「逆転人生」ご覧いただけるといいと思います。

ダニエルは、ダレイオスの肉親でもないですし、長い間付き合いのあった人でもなく、知るようになってから高々1年も経っていないくらいです。

世の組織、権力という暴風のような中でびくびくしながら生きていたダレイオスにとって、ダニエルは、良き仕事のパートナー以上の存在で、さわやかな泉のような存在になっていたのでしょう。

ダニエル6：19-20 (パワポ)

夜が明けると急いで、獅子の洞穴へと向かったダレイオスが、ダニエルにかけた第一声が「生ける神のしもべダニエルよ」です。

「私の信頼する忠臣ダニエルよ」ではありません。

ダレイオスは、ダニエルの人生の最大関心事が、クリスチャンとして、神の言葉を生きることなのを知っていましたが、それが嫌ではなく、

むしろ、ダニエルが神の言葉を生きるクリスチャンだからこそ、信頼できると、まさに逆転の発想が、ダレイオスの内に芽生えていました。

エレミヤ17：5-8 (パワポ)

人間に信頼せず、心が主からはなれているどころか、主なる神様にピッタリくっついているダニエルこそ、ダレイオスが信頼できた唯一の人でした。

人からの信頼と、主への密着度は、なんやかんや言っても、比例するようになっているわけです。わけですね。

ダニエルは、権力の属性に翻弄されながら生きているダレイオスの慰めであり、心のよりどころになっていました。

Conclusion

ダレイオスは、権力の中枢にいましたが、翻弄されるばかりで、平安がありませんでした。

権力ゆえに幸いになるよりも、権力ゆえに苦しみ、権力にもてあそばれました。

同じように、権力の暴風の中に置かれても、一筋の光を見据え続けることで、死をも超える平安と平和を享受している人物を見つけました。

それがダニエルです。

最後にダレイオスの言葉を見てみましょう。

ダニエル 6 : 25 - 27 (パワポ)

ダレイオスが、自分の地位を守ることに汲々となって、権力に振り回される人から、人の平安を願う者に変えられ、主を知る者へと変えられました。

今、世の中に必要なのは、技術でもなく、新しいものでもなく、科学でもなく、強いリーダーシップでもなく、良い政治でもありません。

神の人です。

神は、人を通して、ご自分を表わされます。

人なんか通す必要がないにもかかわらず、人を通して、ご自分を表わすことを決定されました。

だからキリストも、人としてこの地に来られました。

今、時代に求められているのは、神の人です。

世の中ダレイオスのような不安に陥っている人だらけです。

そんな方々に、イエス・キリストの救いと命と癒しの通り管として、私たちが用いられることを願ってやみません。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル 6 : 26